

14) microcapsules 化学塞栓療法により5年 以上生存中の肝細胞癌の1例

加藤 俊幸・斎藤 征史
丹羽 正之・安斎 保 (県立がんセンター)
小越 和栄 (新潟病院内科)
清水 克英 (同 放射線科)

症例は62歳男性, HBsAg(+). 1982.5.31 肝癌 (4.5 cm) で肝右葉切除し, tw(+) 非治癒切除であった. 1984.6.21. 残存肝左葉に 3.5cm の再発を認め, Mitomycin C microcapsules 10mg と Lipiodol 5ml を動注した. 腫瘍は 7cm まで徐々に増大しているが, 計4回 40mg の動注により AFP は, 1,671ng/ml から 13ng/ml へ下降し, 術後7年8カ月, 再発後5年7カ月生存中である. なお治療後の入院期間は 3.6% (75日) にすぎない. なお当院における非切除3年以上の長期生存は4例で, 治療後5年7カ月, 4年3カ月, 3年1カ月, 3年である. いずれも microcapsules 20~40mg を動注しており, 2例は生存中である. また肝切除後5年以上生存は7例である.

15) IPH 症例の検討

長谷川 滋・清水 武昭 (信楽園病院外科)
加藤 英雄・内田 克之
土屋 嘉昭・塚田 一博
吉田 奎介 (新潟大学第一外科)

73例のIPH手術症例の累積10年生存率は手術死亡の2例を除き65.9%であった.

遠隔時死亡23例中, 肝不全は4例に認め, 術後, 吐血を反覆し肝不全となったもの1例, アルコール依存症, 術後合併症などの要因で肝不全となったもの3例であった.

食道静脈瘤出血自体が死因となったものは, 7例のみであった.

他病死の中で, 感染症が6例と最も多く, 敗血症を呈した症例も3例に認められた.

最近, HTLV-1 associated Myelopathy (HAM) を経験し, 細菌感染のみならず, ウィルスに関する疾患も含め, 今後, IPH と感染症との関連につき, さらに検討する必要があると考えられた.

16) 胆汁性腹水を呈した壊死性胆嚢炎の1例

曾我 悟・森 茂紀
鈴木 雄・藤田 一隆
月岡 恵・佐藤 明 (新潟市民病院)
何 如朝・市井吉三郎 (消化器科)
斎藤 英樹・丸田 有吉 (同 第一外科)
渋谷 宏行・岡崎 悦夫 (同 臨床病理部)

病初期に胆汁性腹水を呈し, 手術的に限局性胆嚢壊死を確認した症例を経験した.

症例は73歳男性で, 心窩部痛と発熱をもって発症, 病初期に胆汁性腹水を呈したが, 腹膜炎に至らず, 保存的治療にて軽快した. その後発熱を繰り返し, 画像上壊死性胆嚢炎を疑ったため, 胆嚢摘出術を施行し確定診断を得た.

本症例において, ① 病初期に胆汁性腹水を呈したこと, ② 組織学的に, ロキタンスキ・アショフ洞の閉塞, 胆嚢壁内破裂により限局性胆嚢壊死を呈したと考えられたこと, この2点を意味深いと考え, 今回報告した.

17) 胆石症の体外衝撃波結石破碎療法 (ESWL)

大貫 啓三・清水 直樹
西森 弘・宮崎 裕
堀 聡彦・小島 豊雄
片桐 次郎・渡辺 裕
市田 文弘 (立川総合病院内科)

今回, 我々はエダップ社 LT-01 を用いて若干例にESWLを施行したので報告する. ESWLの適応は, 25mm以下, 3個以内の石灰化のない胆嚢胆石症である. US所見は, 土屋のIa型が最も良い適応となる. 症例1: 無症状胆石例で, USで胆嚢内に径16mmの土屋Ia型の胆石1個が認められ, CTでは周囲の胆汁とisodensityであった. 1.25Hz, 60分間のESWLを施行した. 施行直後には胆石はcloudy pattern化し, 3日後には粉状粒子の堆積型へと変化した. ESWL18日後には粒状の胆石片を少数残すのみに減少した. 症例2: 右季肋部痛を主訴に来院し, US, DICで径24mmの結石1個と小結石を多数認めた. 本人の希望もありESWLを施行した. 1回施行後胆石の破碎効果は認められたが, なお数回のESWLが必要とおもわれた.

18) 腹痛発作を繰り返した鉛中毒の1例

真船 善朗・尾崎 俊彦 (済生会新潟総合)
本間 明 (病院消化器科)

近年では, 労働条件の改善, 鉛特殊健康診断の普及により, 典型的な症状を示す鉛中毒は非常に稀となってい